

記念イベント(第1部)

パネルディスカッション

ロータリーは
何をなすべきか

ロータリーの「サービス」の意味

司会 ただいまより記念イベント第1部、パネルディスカッションを始めさせていただきます。

さて、毎日いろんなニュースが伝えられまして、国際的にも、国内的にも本当に混迷した時期が続いているのですけれども、きょうは、次世代を担う若い人たちにも加わっていただきまして、RIテーマ「人類が私たちの仕事」、そして地区大会のテーマに沿いまして、「ロータリーは何をなすべきか」について話し合っていきたいと思います。

それでは「ロータリーは何をなすべきか」をテーマに、本間先生、どうぞよろしくお願ひいたします。
本間 八木さん、どうもありがとうございます。最初にまず、サニー ブラウンさんにこのパネルに出ていただきまして、われわれとディスカッションする機会を与えていただきましてありがとうございます。45分と時間が非常に短いので、早速パネルに入ってまいりたいと思います。

まず最初に、若林さんから口火を切っていただけますでしょうか。

若林 それでは私がトッパッターですが、ブラウンさんがせっかくお越しでございますので、ブラウンさんに質問したいと思っております。

昨日よりの基調講演を含めて、「ボランティア」という言葉がしきりに出ております。そこで大変基本的な質問ではございますけれども、ロータリーには4大奉仕があり、その中でもとりわけ社会奉仕、国際奉仕のプログラムにおいての活動を、私たちロータリアンはサービス、奉仕と位置づけております。

●パネリスト

RI会長代理 Irving J. "Sonny" Brown
大阪東RC/ガバナーノミネー 若林 紀男
大阪御堂筋RAC会員 高原 尚美
大阪RAC会員 水野 英人

●コーディネーター

大阪大学大学院経済学研究科教授
大阪RC会員 本間 正明

●司会

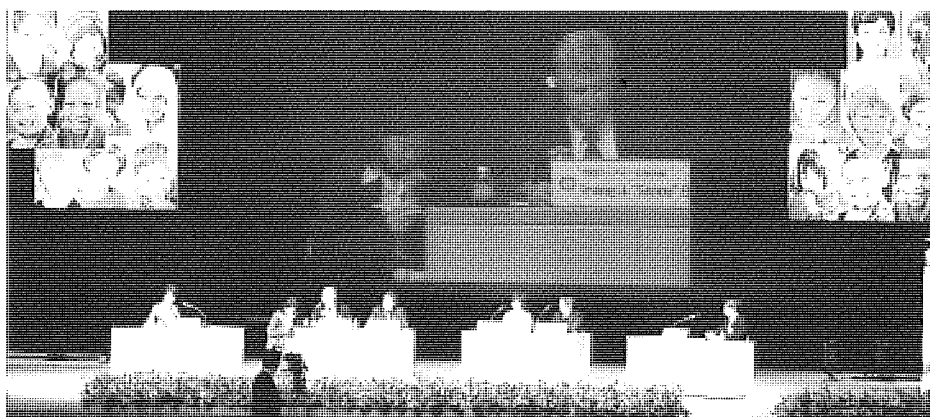
八木 早希 (毎日放送アナウンサー)

そこで、世間一般に言われているボランティアと、ロータリーでのサービスにはどのような違いがあるのかということ、大変不勉強でございますけれども、お尋ねしたいと思っております。

ブラウン ありがとうございます。このような機会をいただきまして、お答えさせていただきますことを本当にうれしく思っております。

ロータリーの4大奉仕。これはロータリアンといたしまして、私どもが義務として受け入れている4大奉仕ということになります。ボランティアとの違いですが、ボランティアというのはもっと個人的に、義務というよりも、いろいろなプロジェクトとかイベントに対してもっと自分を関与させるということになるのではないかなと思うんです。ロータリーとしてはもちろん義務として、また責務として自分が関与しているという形になると思います。

そして一方、ボランティアのほうですが、もっと自主的な形で参加するという違いがあると思うんです。一つの例を取ってみますと、私自身もロータリアンとしてクラブサービスやコミュニティサービスに参画しています。しかし、そのほかに個人の資格で、コミュニティに対しまして、若者たちと一緒に、また対コミュニティという形でいろいろなボランティアの活動をしています。コミュニティが私にいろいろなものを与えてくれた。ですから私もお返しをしなければいけない。そういった意味で、私は自主的な活動をしています。それは義務や責務ではありません。何かを受け取ったから、私のほうもお返ししたいとい



う思いでやっております。

本間 若林さん、よろしいですか。

若林 はい、ありがとうございました。

ローターアクトへの期待

本間 たくさん質問がありますので、順番にブラウンさんに質問をぶつけてみたいと思います。次に高原さん、お願いします。

高原 私はローターアクトの活動をしておりますので、ローターアクトとしての視点から質問させていただきますと思います。

ロータリークラブの方々が、ローターアクトのボランティア活動に対して期待していることを教えてください。

ブラウン ありがとうございます。ロータリーがローターアクトに対して持っている期待は大であると思うんです。つまり、ローターアクトの方々がプロジェクトを展開するにしろ、いろいろな奉仕をするにしろ、ロータリーに対してエネルギーを与えてくれる、そして活性化してくれるということがあると思います。もちろん両者はチームワークで仕事をすることが必要ですし、お互いに学習することが必要です。そしてそのような交歓によってリーダーシップの原則を学んでいくというプロセスが必要です。そしてローターアクトのほうでは、一所懸命、関与してもらうことが必要でしょう。

また、いろいろなプロジェクトを実行するに当たって、たとえば間違いがあったりします。それは学習効果で乗り越えることができると思うんで

す。また、ロータリークラブに対して、ローターアクトのほうにエネルギーを与えることができます。

ともすればロータリーの皆さま方は、何とかいくださうということでも何もしないで待っている、静観していることがあったりします。そういうときにはローターアクトがエネルギーいっぱいに関与し、そして参画することによって一緒に仕事をすることができると思うんです。一緒に仕事をすることによりまして、そこから出てくる機能性が高まりますし、またパワフルになります。

そして、ローターアクトが将来ロータリアンになるわけですから、若い人々のニーズや、何をしたいかということ、ロータリークラブがその交歓の中で把握することができると思うんです。

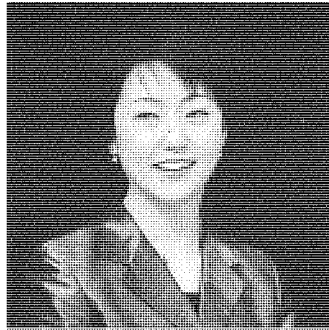
リーダーシップの修得

本間 世代間のコミュニケーションがロータリアンとローターアクトの方々のあいだで展開され、次世代につなげていくことは非常に重要な要素だと思います。

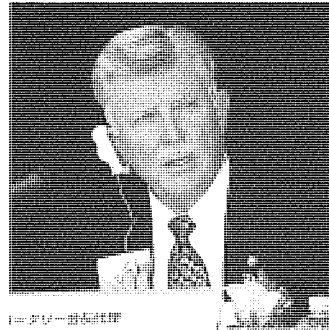
もうお一方、ローターアクトの水野さん、お願いします。

水野 日本もアメリカも、経済や文化などの面で成熟化してきています。そういう高度化の中である意味の多様化があるという中で、ボランティアも高度化、多様化してくる。その中で、多様化に対するキーワード、解く鍵みたいな言葉があれば教えていただきたいと思います。

ブラウン 重要なご質問をいただいたと思います。それこそ私が常に重要であると思っている点



司会 八木早希



パネリスト Irving J. "Sonny" Brown



パネリスト 若林紀男

を指摘されたと思います。キーワードとして申し上げますと、inspired leadership (精神が鼓舞されたリーダーシップ)、そういったものが必要ではないかと思うのです。

ロータリアンとしてこれからやっていかれるローターアクトの若者たち、こういった人々のリーダーシップがいま求められています。昨日も申し上げましたけれども、私どもは23年間、RYLAプログラムをやってきました。また若い男女とも1週間ごとにRYLAキャンプを組んでおります。その中で私どもは、若い人たちとできるだけコミュニケーションを取るよう努めています。そうすることによりまして、年齢を重ねた者の経験を若い人たちに聞いてもらうことによって、リーダーシップを取ることを学んでいただくことができているからです。

私は、リーダーシップは学習できるものであると思っています。若いロータリアンの方々がRYLAに参加し、そしてまた私どもロータリアンもRYLAに深く関与することによって、必ず将来がよくなると信じているわけです。お互いにゴールをレビューすることができますし、またリーダーシップに何が求められているかということを経験することができます。私も毎年、そのような形で参加しておりまして、リーダーシップのチャレンジとは何ぞやということ、常に私は自問しているのです。

昨日も申し上げましたけれども、ロータリーにとって、ロータリーのリーダーシップを取っていくということが必要であり、またロータリアンの

方々がなぜリーダーシップを取っていかないのか、ロータリーにいる理由は何なのか、自分の存在理由は何なのか、そしてこれからもロータリーに続ける理由は何であるかということ、を問うていく。そういったセッションが必要であると思うのです。そういった意味で、私も年長者が経験を話し合っ、いろいろな形でリーダーシップを伝えていくことが必要です。

本間先生が、いみじくもコミュニケーションの重要性をおっしゃいましたけれども、コミュニケーションはただとるだけではなく、効果的であればいけないと思います。自分たちロータリーの中でちゃんとしたコミュニケーションをとってこそ、私どもの家族、ビジネス、コミュニティ、サプライヤー、そして顧客の方々ともっとよいコミュニケーションを持つことができ、お互いの中で温かい友好関係を深めることができ、そして協力して互いのゴールに到達できると考えております。

ロータリー活動とボランティア

本間 日本でも随分若い方々が、阪神・淡路大震災をきっかけにしてボランティア活動に関心を抱くようになり、具体的な行動にもコミットするようになってきたわけですが、そのことをする上でいくつか問題があるのだらうと思います。

さらに高原さん、いまの点、あるいはどういう問題があるか、質問していただければいいかと。

高原 次はブラウン会長代理に、エルパソロータリークラブを通じて、またご自身でどのようなボランティア活動をされているかということも交え



パネリスト 高原尚美



パネリスト 水野英人



コーディネーター 本間正明

ているいろいろお聞きしたいと思うのですが、日本においてはボランティアと仕事を両立するのがなかなか難しい状態にあるのですけれども、アメリカのボランティアの現状を教えてください。

ブラウン よく私の妻に「あなた、ロータリアンをやっている、よくまあボランティアの活動をする時間が見つけられるわね」と質問されるんですが、私は、それは優先順位の問題だと思うんです。私自身、サービス産業に従事しています。そういった意味でコミュニティとも深く関わっているわけなんです。私がいろいろな奉仕をいたしますと、私の会社のビジビリティも上がります。そしてある意味で、ビジネスという観点から奉仕することができると思うのです。ある人が自分の心の中で、本当にコミュニティのことを思っているということ、ほかのコミュニティの人が知るようになりますと、その人たちが「じゃあ、私もやってみよう」と思うと思うんです。

ですから、時間を見つけることができるかどうかというのは、プライオリティの問題ではないかと思っています。心から自分がやりたいと思えば、そのような優先順位をつけることもできますし、ロータリアンとしても、ボランティアとしても時間を見つけることができるんです。

あと、エルパソロータリークラブでの活動についてお尋ねになりましたが、300人のメンバーと45のアクティブ委員会を持ってあります。そしてその中で社会奉仕を行っています。特に24人のRYLAの学生を抱えていますので、彼らをキャンプに連れて行ったり、各400ドルの資

金援助をしております。そうすることによりまして、若い人々が持っている才能をロータリーとして育てたいと思っています。また、そういった若い人々の気持ちをわかることも重要ですし、それによって若い人が参加する、関与することを経験として見つけてくれることが重要であると思うのです。若い人がキャンプに参加する。そして私どもがそれに対していろいろな形で関与しています。

また、そのほかの活動といたしまして、チームで寄付や資金を集めることをしております。資金を集めるというのは単に資金調達ではなくて、自分たちの楽しみも高まるということなんです。チームで一所懸命することによってその成果が見られることは、非常に意を強くするところです。またボランティア活動におきまして、いろいろな資金がどういった組織に使われているかということも非常に重要なことだと思います。

たとえば私どものほうでは、大学に対しての奨励金や、また国際的なコミュニティサービスといたしまして、川を渡ったメキシコの12のクラブと私どもの7つのクラブが協力、姉妹関係を持っております。そして大学への援助金ということでも同額補助をしているようなプログラムもあります。これはロータリー財団の参加のもとに行われているものです。またそれ以外に、姉妹クラブとして他クラブと一緒にプロジェクトを行っております。

追加になりますけれども、個人的にどういう関与をしているのかというご質問もあったと思いま

す。私はボランティアといたしまして、この3年前からロータリーでパイロットプロジェクトとして始めておりますWCS（ワールド・コミュニティ・サービス）つまり、世界社会奉仕にも参加しています。これは1年間で行われるタスクフォース以外のところで行われるものですが、これに参加しております。またリーダーシッププログラムに参加しております、ちょうど訪日する少し前の週末にも参画いたしまして、7つのクラブから来た20人の若い人々と集いました。

理想の実現へ向けて

本間 社会的貢献、あるいはボランティアというのは、時間を人に与えて貢献をする、あるいはお金を使って貢献をするという部分で、まさにブラウンさんがおっしゃった通りプライオリティづけになるのですが、これは考えてみますと、どういう具合にプライオリティづけするのか難しいなと、おそらく若い方もお考えじゃないかと思えます。

水野さん、そのへんのところはどうですか。

水野 いろんなボランティア活動をされていると思うんですけど、必ず理想と現実のギャップが生じてくると思うのです。活動をされてきている中でどのような理想と現実のギャップがあったのかということと、その課題をクリアするためにどうしているのかということをお聞きしたいと思います。

ブラウン そのお答えをするには、ロータリアンといたしまして少し慎重にならなければいけません。というのは、ロータリーで活動しておりますと、夢はよくかなうということで、かなってしまっても仕方がないということになりますので、そのギャップのお話をされているわけですね。私の経験を申し上げますと、3年前のジェームス・レーシー会長がテーマとして掲げられましたのは、「Follow your Rotary dream（ロータリーの夢を追い続けよう）」でありました。それこそまさに、私が23年前に思い立った私の夢を思い起こさせてくれたことでした。

私はその当時、最初にこのRYLAに参加し、

すばらしい経験をさせていただきました。そのときの経験を誰かと分かち合いたかったです。一人の若い17歳の男の子が、キャンプに行っても1週間でもすごい成長を遂げたことが忘れられなくて、その経験をほかの人にも聞いてもらいたかったのです。私はこのように関与するということがいかにすばらしいことであるかを、そのとき頭の奥底に秘めました。そしてそれを私の理想としてまいりました。

そしてその当時、私はレーシー会長に示唆をしたのです。「世界的にこのRYLAをもっと拡張しようではないか」と。そしてレーシー会長の命を受けまして、最初の国際RYLA委員会の委員長にも任命されました。そのときに「あなたはどうしたいのですか」と会長に聞かれました。

私は、「いろんなRYLAのプログラムがある。そして彼らがやっていることは一つとして間違っていたことをやっているところはない。みんな前向きな形でやっている。そしてRYLAはロータリーのリーダーシップを育ててくれる。RYLAがこのような若い人を理解し、育ててくれるんだと思う。しかし、まずはそれがどういう形でやられているかということ調査しなければいけない。そしてメニューで世界的にどういったことをやっているのかを調べ、各ロータリークラブやロータリーの地区がどういうふう若い人を育て、またRYLAのプログラムの潜在性があるのかを理解するようにし、それを踏まえた上でこのRYLAの活動をもっと拡張していこうと思う」と言いましたら、レーシー会長に「じゃあ、その計画通りやりなさい」と言われたので、私は実行してまいりました。

そして8カ国から8人が集まりまして、いろいろなアイデアを交換いたしました。その中にはインドのロータリーの理事をされていた方がいて、彼が運営されている学校では、18カ国から600人の学生を集めて、RYLAのレッスンをしました。また南米のある地区におきましては、8カ国から学生を招聘したところもあります。また米国におきましては2回のワークショップを

開き、26の地区が2回集まって、どのようにすればRYLAを改善していくことができるかということを話し合いました。ですから、これが私が持ち続けてきた夢ということになります。

そして最終的に、RYLAの第1回の大会としてサンアントニオで夢が現実になったわけです。32カ国から120人の学生を招聘し、セークリットハート大学におきまして、さまざまなプログラムを展開することができました。ライラリアンと一緒にあって、インターアクトと若いリーダーが集まるという形で、これからもこのような活動を続けていきたいと思っています。

先ほどの理想と現実のギャップのことに戻りますけれども、それは決して大きいものではないと思います。ギャップというものがあっても、それは越えられるギャップであると思います。ただし、そうするためには忍耐力と、決意と、そして個人のコミットメントが必要です。しかし、そのような思いがポジティブで前向きであったなら、ロータリアンであろうと、インターアクトであろうと、ライラリアンであろうと、みんながこのロータリーで持っている夢を現実化することができると思っています。

ポリオ撲滅による信頼の獲得

本間 どうもありがとうございます。人の夢をどういうふう実現するかということは、継続的な思いをどのように具体的な行動に結びつけられるかということだと教えていただいたような気がいたします。

これまでの議論の総括として、若林さん、ロータリーあるいはロータリアンの役割について、最後にご質問いただけますでしょうか。

若林 私が皮切りに、ロータリーのサービスとボランティアの違いをお尋ねしたばかりに、ボランティアを中心にした質問になりましたけれども、ブラウンさんの経験とお考えがよくわかりました。そこで、本大会のテーマ、「ロータリーは何をなすべきか」という大上段に構えた大きなテーマではありませんけれども、私は、国際社会を含

めた社会に対してターゲットを絞って質問したいと思っております。

ロータリーはポリオ・プラスに代表されるような大きなプログラムから、WCS部門で行われている種々のプログラムに対して、私たちロータリアンの大きな比重を占めていると思われる資金援助と、ロータリアン個々の参加と奉仕を行ってきました。しかし、この伝統的なロータリーの活動は、一般社会の人々を巻き込む大きなうねりとなり得ていないのが現実であります。これからの私たちロータリーのめざす方向の一つとして、私たちの活動が大きな影響力を持ち、積極的に世に働きかけるものとならなければならないのではないかと私は常々思っておりました。

そこでいい機会なので、このような考えはどうかということブラウンさんにお尋ねしたいと思います。

ブラウン ご質問の確認をさせていただきたいのですが、これからロータリーで潜在的なプロジェクトをいろいろな形で実行するにあたって、世界的にもっと影響力を持つようなプロジェクトについてお伺いになっておられたのですか。

本間 世界的じゃなくてもいいんです。一般社会に対してわれわれの働きかけが、ロータリーだけじゃなくて大きなうねりになって影響を及ぼすということを言っているわけです。

ブラウン わかりました。このポリオのプログラムですが、私もロータリアンのみならず、一般世間の人々に対しても彼らに関与してもらおうプログラムになっています。特にこのポリオ・プラスは企業や政府に協力してもらってポリオを撲滅することを目的としています。それが完了するまではどんなプロジェクトも考えてはいけないうるかということになると思うのですが、それはいろいろ考えていかなければいけないことだと思います。規定審議会によりまして、まずはポリオを撲滅させてから他のプロジェクトにかかるべきである、まずはそれを完了させるべきであると言われております。

ただ、その間におきまして、ほかのいろいろな組織や世の中の人々の協力を得ることができない

かという、いろいろな財団や、またロータリーのガイドラインに則ってそれは可能だと思っております。私どもはロータリーというだけで世界からいろいろな尊敬を集めています。しかし世界の中には、ほかの組織の中でそれを利用しようと思うような組織もあるかもしれません。そういったことは決してあってはいけないわけで、それに対しては慎重にならざるを得ないと思います。

しかし一方では、私どもに協力をし、一緒にやっというのではないかという真摯な思いを持っている組織もあると思っております。そういったところに対しては常に目をオープンにし、機会を見つけることが必要であると思っています。しかし、まずはポリオのプログラムを完了させること。そして、われわれがやってきたことに対しての信頼性を獲得することが必要であると思っています。

家族との時間

本間 どうもありがとうございました。もう時間が来てしまいました。いろいろブラウンさんにご質問したいことがあるのですが、最後に私がパーソナル・クエスチョンをさせていただきたいと思っております。

私もいろんな活動をしているので、家族から「家族に対する時間の割き方が少なすぎる、ケアを少なすぎる」と言われるのですが、ブラウンさんの家族の皆さま、とりわけ奥さまがそういう活動をされているブラウンさんに、コンプレインみたいな形で何か意見をおっしゃることがありますか。

ブラウン 私の答えは「はい」です。妻は私に何だかんだと申します。「どうしてこんなに時間を割いて、こういうことができるの」と言われます。ただ、私は、過去よりもいまのほうがもっとロータリー活動やボランティア活動に時間を割くことができていると思っています。子供が小さかったころは、やはり子供と一緒にいることにプライオリティを置いておりました。彼らが高校を卒業し、大学に行くころになりますと、私は妻とともにロータリーの活動にもっとアクティブに関与することができたと思っています。

それと、私どもは夫婦のみならず子供たちにもロータリーの活動に入ってもらい、いろいろな形で参加してもらいました。これが非常に奏効したのではないかと考えております。先週、いくつかのメキシコの地区大会に出たと申し上げましたけれども、メキシコにおきましてはロータリーの活動は家族ぐるみで行う活動になっております。また40歳以下の45人の若い人々で構成されているクラブもございまして、これはロータリーの息子さんや娘さんがつくっているクラブです。そのお子さんたちはロータリーファミリーとして育てられ、またお母さんも各ロータリークラブの委員会でアクティブに活動していらっしゃる方々です。

ですから、私の家庭安全の秘訣は、ボランティア活動をするにあたっては家族にプライオリティを置きなさいということです。家族や子供たちの成長は早いです。そういうふう子供たちを見なければ、子供たちはどこかに行って無視されてしまいます。そしてボランティア活動をするにしても、家族との時間を阻害しないような形でそういう時間をつくりなさいということです。

それから、追加になりますけれども、先ほどから私の答えの通訳を聞いていますと、かなり長くしゃべりすぎたようです。「こんなにたくさんしゃべるやつはパストガバナーだな」と言われそうなので、このへんで終わりにします。

本間 ありがとうございます。私はブラウンさんのように非常にアクティブな活動を心広く許し、世界のために貢献されている奥さまに対して、感謝の気持ちを表したいと思って、あえて質問させていただきました。

残念でございますが、時間が来ておりますので、これでわれわれのパネルを終わらせていただきたいと思います。八木さん、お願いいたします。

司会 本当に知らず知らずのうちに時間は過ぎていくものですが、「夢は追えば必ず実現する」という心強いお言葉をいただきました。

これもちまして、記念イベント第1部、パネルディスカッションを終了いたします。